

特集・地域研究の新地平

アフリカ地域研究と国際協力

— 在来農業と地域発展 —

掛 谷 誠*

**African Area Studies and International Cooperative Activities:
Indigenous Agriculture and Sustainable Rural Development**

KAKEYA Makoto*

The joint research project between JICA (Japan International Cooperation Agency) and the Sokoine University of Agriculture (SUA) in Tanzania focused on an integrated agro-ecological study of the indigenous agriculture of the Matengo people in southwestern Tanzania, especially their Matengo pit (*ngolo*) system, a cross-ridge system with numerous pits on steep mountainous slopes. The study revealed the multiple functions of the *ngolo* system: erosion control, maintenance of soil fertility, weed control, provision of underground drainage system and so forth. The agro-ecological significance of the *ngolo* system could best be understood as the result of mutual interactions among ecology, society and culture in the Matengo history.

Through this joint study, Tanzanian and Japanese researchers acutely recognized the need for rural development based on the indigenous farming technology, knowledge, and wisdom. Thus efforts were mounted for the establishment in 1999 of the Centre for Sustainable Rural Development in SUA as a JICA project. This article discusses the role of international cooperative activities in African Area Studies through examining my experiences in the above projects.

1. マテンゴの在来農法と国際協力

1992年の5月、私たちは、タンザニアの南西域に広がるミオンボ林帯 (miombo woodland) での農業の現況調査を進めていた。メンバーは同僚の荒木茂氏と私、それにソコイネ農業大学 (Sokoine University of Agriculture, 以下 SUA と略記) のルタトラ博士 (Dr. D.F.Rutatora) の3

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

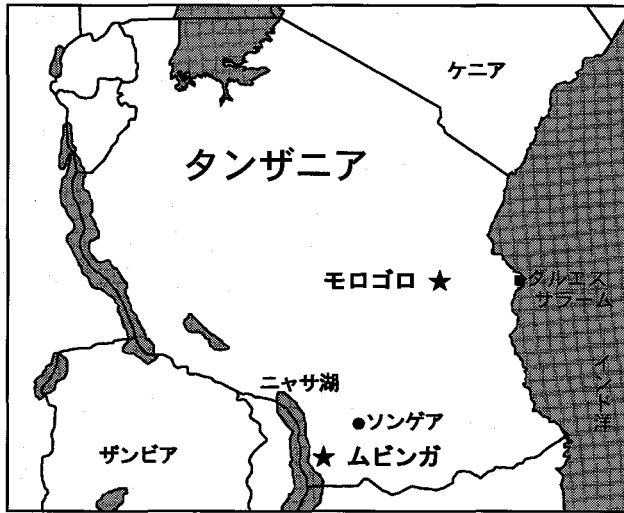


図1 プロジェクトの対象地

人だった。荒木氏と私は、国際協力事業団（JICA）の専門家としてSUAに派遣され、タンザニアにおける「農地の土地分級調査」に従事していた。SUAは、1984年にダルエスサラーム大学（University of Dar es Salaam）の農学部が独立して創設された大学であり、タンザニアの農業発展を担う唯一の高等教育研究機関である。ダルエスサラームから西へ約200キロメートル入った内陸部の町、モロゴロ（Morogoro）にある。ルタトラ博士は、SUAの農学部のスタッフであり、農業教育・普及学科に所属する研究者であった。この調査の過程で、ルブマ州（Ruvuma region）・ムビンガ県（Mbinga district）の山地帯を訪れ（図1）、そこでマテンゴ（Matengo）の在来農法に出会った。この出会いが、私の研究の視点や姿勢の大きな転機となった。

ルブマ州の州都ソンゲア（Songea）を出て、車はニャサ湖（Lake Nyasa）に向かう道路を走る。そしてムビンガ県に入ったあたりで、窓外の景観は、それまでのミオンボ林が一変し、急

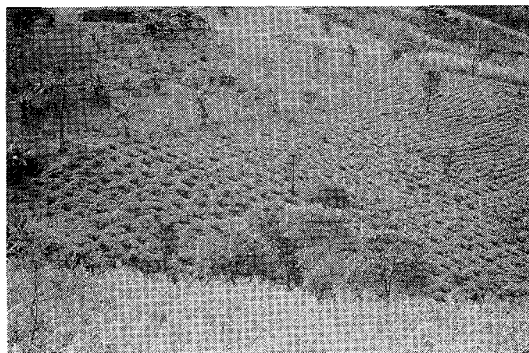


写真1 ンゴロ畑の景観

峻な山地斜面に緑色の帯が格子状に広がる美しい畑が展開する。あるいは、蜂の巣のような穴が整然と並び、穴の周辺の畝が緑に彩られたような畑の景観であるといってもよい（写真1）。それが、マテngo語でンゴロ（ngolo）と称される畑である。ンゴロはマテngo語で「穴」を意味する。英語ではマテngo・ピット（Matengo pit）あるいはピット・カルティベーション（pit cultivation）と呼ばれる。ここでは「掘り穴耕作」と訳しておきたい。ンゴロ農法については後に概観するが、それは土壌侵食の防止や有機肥料の確保などの多くの機能をもった在来の集約農法であるといつてよい。

私は、それまで「ミオンボ林帯における自然と文化の関係」を基本的なテーマとし、西部タンザニアに住むトングウェ（Tongwe）や、北部ザンビアに住むベンバ（Bemba）などの焼畑農耕民を対象として生態人類学的な研究を続けてきた。ミオンボ林は、マメ科のジャケツイバラ亜科に属する特定の樹種群（広範な地域でミオンボと総称されている）を構成種とするウッドランド（woodland, 疎開林）であり、サハラ以南のアフリカの4分の1の広さを占める植生帯である。このミオンボ林帯で、焼畑農耕という「粗放」な農業を営む人々の調査を続けてきた私の目には、山地のミオンボ林を開墾して造成されたンゴロ畑が、別世界の景観のように見えた。ンゴロ耕作の農業生態や、それを支える経済・社会・文化の機構、その歴史的な背景を解明する総合的な研究が必要だ。私たちは、そう考えた。タンザニア人のルタトラ博士もンゴロ畑を見て、深い感動を覚えた様子だった。

SUA 側からの強い要請もあつて、当時の京都大学アフリカ地域研究センターを中心とした日本の研究者との共同研究案を練り上げることも、JICA派遣の専門家としての重要な仕事であつた。私たちは、「在来性」を主軸に据え、タンザニア人の研究者と地域の将来を共に考える研究を進めたいと思つていたので、マテngoのンゴロ農法は、うつつけの対象であつた。これまで、ベンバの焼畑農耕を対象として農学者と続けてきた学際的な調査経験も生かすことができる。こうして、ンゴロ農法を核とした在来農業に焦点を当て、「ミオンボ・ウッドランドにおける農業生態の総合研究」が立案され、1994年の5月から3年間、JICAの研究協力事業として実施された。

この研究協力では多くの成果が得られたが、最大の成果は、在来の資源や農業技術、知識、あるいは知恵について深く学び、それらを基礎とした地域発展の道を探ることの重要性が、タンザニア人と日本人の共同研究を通して確認されたことであろう [JICA 1998]。そして、それらの成果を基盤にして、JICAのプロジェクト方式技術協力によりSUAに地域開発センター（SUA Centre for Sustainable Rural Development）を設置し、在来性のもつポテンシャルに根ざした内発的な発展、あるいはアフリカの発展の可能性を求めめる実践的な活動が、1999年の5月から5年計画で始まつた。

この小論では、私自身の個人史を背景としつつ、本格的な国際協力の起点となつた研究協力

の内容を総括し、また「SUA 地域開発センター」プロジェクトの概要について述べ、アフリカ地域研究と国際協力との関係について考察を試みたい。

2. 個人史と国際協力

私のアフリカ研究は、1971年にタンザニアの西部に住むトングウェの調査から始まった。それから20年余り経過して、私はタンザニアに舞い戻り、国際協力への道を歩みだした。地域研究について強く意識し始めたのも、そのころであった。その契機となったのは、トングウェやベンバなど、長くつきあってきた人々の生活の急激な変化だった。村や民族レベルの生活は、国家や世界的なレベルの政治・経済の動向と連動し、大きく変貌していった。自然の中に埋もれるようにして暮らすトングウェや、ミオンボ林を巧みに使いこなした独特の焼畑農耕に生活の基盤をおくベンバへの深い共感が、私のアフリカ研究を支えてきたのだが、その根底が大きく揺らぎ始めたのである。それは、「世界の中のアフリカ」や「同時代を生きるアフリカ」を、しっかりと把握しうる総合的な地域研究の必要性を痛感させる経験であった [掛谷 1999]。

現代アフリカは、停滞する経済、食糧問題や環境問題、民族紛争や国民国家の動揺、エイズの蔓延など、多くの困難な問題を抱えている。奥地の村々での生活も、このような問題群と無関係ではありえない。村や民族社会の変容を追跡しつつ、私は、現代アフリカが抱える諸問題の解決にも貢献しうる研究のアプローチについて考え始めていた。それは、「問題群としての地域」[海田 1993] という視点を持ち、より実践的に地域固有の問題群にアプローチする方法であるといってもよい。そして、「同時代を生きるアフリカ」を深く多面的に捉えるために、地域発展への実践的な関与を通して地域理解を試みたいと考え、具体的な国際協力の道を模索し始めた。

このような国際協力の道を選択した個人的な背景として、川喜田二郎先生との出会いについても述べておかなければならない。私は1979年から1986年まで筑波大学の環境科学研究科に所属していたが、その赴任時から3年半、川喜田先生とは同じ文化生態学研究室のスタッフとして、ともに調査プロジェクトを進め、議論し、大学院生を指導してきた。その過程で、川喜田流の野外科学や国際技術協力の思想と方法について、多くのことを学ばせていただいた。実際に、SUA との研究協力や「SUA 地域開発センター」プロジェクトを進める折々に、そのときの経験が生きていることを実感した。

3. 在来農業の総合的研究—JICA 研究協力—

3.1 研究の目的と構成

JICA の研究協力事業として1994年から始まった「ミオンボ・ウッドランドにおける農業生態の総合研究」は、SUA の農学部との共同研究であり、日本側は高村泰雄先生を代表者とし、

京都大学のアフリカ地域研究センターと農学部の教官が中心的なメンバーとなって進められた。前にも述べたように、この研究協力は、ルブマ州・ムビンガ県に住むマテンゴの社会を対象とし、ンゴロ農法を核とした在来農業の特性を学際的な共同研究によって解明することを目的としていた。これまでも数人の研究者が、ンゴロ農法について報告しているが [Pike 1938; Allan 1965; Basehart 1972; Schmied 1988]、その総合的な調査は、この研究を嚆矢とするといつてよい。

マテンゴの居住域は、海拔 900～2,000 メートルの起伏に富んだ地形を呈しており、マテンゴ高地と通称されている。この高地に分布するマテンゴの村は、大きく2つの地域に分けることができる。1つは、標高が1,300メートル以上の山地帯に分布する旧村地域であり、もう1つは1,300メートル以下の丘陵地帯に分布する開拓村、あるいは新村地域である。特に1960年以降、人口増加や土地不足が主な要因となり、山地帯から丘陵地帯への移住が進んだ。山地帯と丘陵地帯のそれぞれで数ヶ村を選び (図2, 図3)、実験タイプの調査 (土壌侵食試験, 圃場実験, 焼畑実験など) と、基礎的な自然環境の調査 (気象観測, 地形・土壌の構造調査, 植生調査), 村単位の社会経済に関するケーススタディ, および後に詳述するがマテンゴ社会の重要な社会生態的な単位となる「ンタンボ (*ntambo*)」の総合調査を組み合わせ、それらの統合を目指した。その調査の構図は図4のように整理できる。この研究の成果は英文の報告としてまとめられた [JICA 1998]、ここでは、ンゴロ農法の特性と、新しい「ソコイネ農業大学地域開発センター」プロジェクトにつながる部分に焦点を合わせて整理しておきたい。

3.2 ンゴロ農法の概要と歴史的背景

ンゴロ農法は、山地斜面の草地を耕地に変える農法である。開墾は、山腹のミオンボ林や山地林を伐採して焼畑耕地として利用することから始まる。数年間はシコクビエを耕作し、そのあとの草地をンゴロ畑にして、インゲンマメやトウモロコシを栽培するのが標準的なやりかたである。この地域は、11月から4月まで続く雨季と、5月から10月までの乾季に明瞭に分かれる。年間の降雨量は1,200ミリ程度である。雨季が終わりに近づいた3月、男たちは繁茂する雑草や前年の作物残渣を刈り取り、2週間ほど乾燥させ、その干し草を束にして格子状に並べる。その後、女たちが格子の間の土を鍬で掘り起こし草束の上にかぶせる。この畝上にインゲンマメをまき、軽く覆土する。こうして掘り穴と格子状の畝ができあがる。インゲンマメは6月から7月にかけて収穫し、ンゴロ畑は雨季の直前まで放置される。11月に畝にトウモロコシをまき、翌年の7月頃に収穫した後は、その翌年の3月まで休耕させる。そして3月に、畝と穴の部分を交替させて、再びンゴロを造成する。ンゴロ農法は、短期の草地休閑を組み込み、2年サイクルの輪作システムをとっている。

雨季に集中して雨が降る山地で、土壌侵食を防止し、また有機肥料を確保するなどの機能をもったンゴロ農法が練り上げられてきたのだが、それはマテンゴの民族形成史と深く関わって

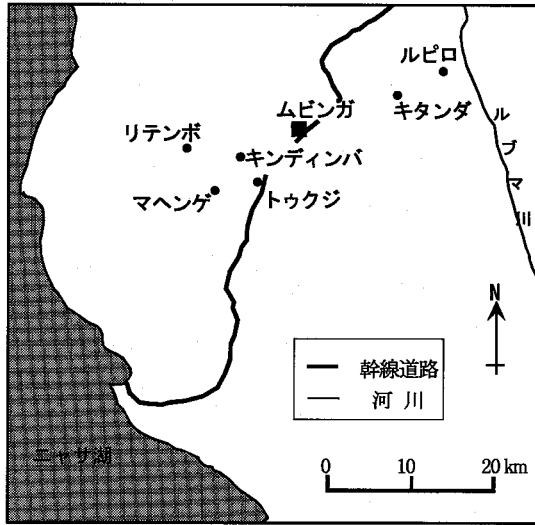


図2 マテンゴ高地での調査地

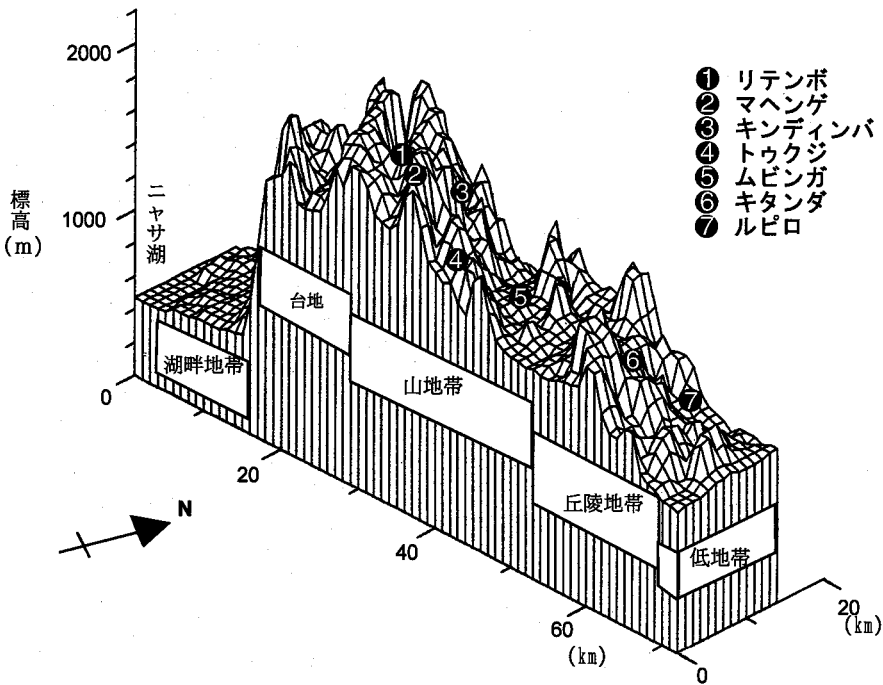


図3 調査地の断面図 (原図 [JICA 1998: 41])

いる。マテンゴは、異なった地域から移住してきた人々が混住して形成された民族であり、小集団が分散して居住していた可能性が高い。しかし、マテンゴ社会は19世紀の中頃から大きく変容する。好戦的な民族のンゴニ (Ngoni) が南部アフリカから北上し、ソングア地方に侵攻

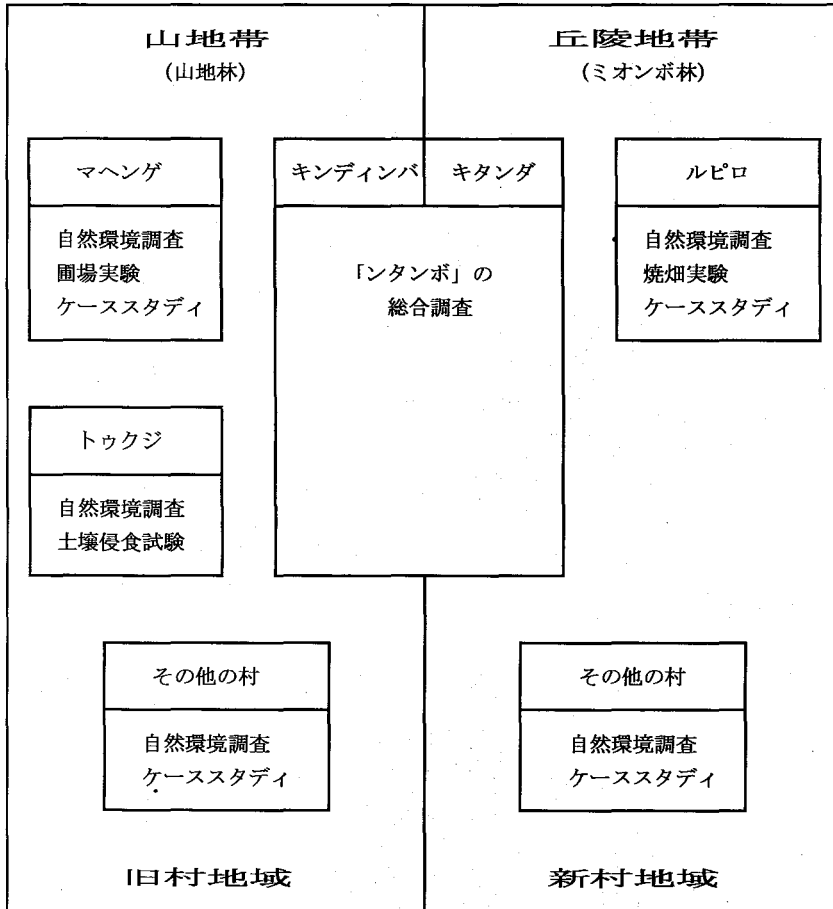


図4 マテンゴ調査の構図

してきたのである。このンゴニの侵略から逃れるために、マテンゴは現在のリテンボ (Litembo) を中心とした急峻な山地に退避し、限定された山域内に多くの人々が集住することを余儀なくされた。そのような生活条件が、集約的なンゴロ農法を生み出し、発達させてきたと考えられる [Basehart 1972; 1973; Ndunguru 1972; Schmied 1988]。

19世紀末にはドイツによる植民地化がはじまり、後に英国の植民地へとつながっていくのだが、このころからマテンゴの人々はリテンボ周辺域から他地域へと移住していく。山地帯での中心的な調査地となったキンディンバ (Kindimba) は、1900年前後に人々が移住して形成した村である。1920年代の後半にはコーヒー栽培が導入され、重要な換金作物として、その栽培が普及していく。また移住の流れは、上述したように、1960年頃から丘陵地帯へと広がっていく。もう1つの主要な調査地のキタンダ (Kitanda) は、その頃に形成され始めた村である。

標高が1,300メートル以下の丘陵地帯はミオンボ林帯であるといつてよい。しかし山地帯の

旧村地域で、残存する自然木を同定し、ごく一部に残っている山地林の植物相の調査も試みた結果、旧村地域の原植生は、亜高山性の山地林であるとの結論に達した。つまり、ンゴロ農法は亜高山性の山地林を起源地とし、後にミオンボ林帯に広がっていった可能性が高い。

3.3 ンゴロ農法の農業生態

これまでに強調したように、ンゴロ農法の重要な機能の1つは土壌侵食の抑制である。畝と穴によって細かく斜面が区切られ、降雨時にンゴロ畑の表面を流れる水は分散し、侵食の営力にはなりにくい。激しい降雨のときには、穴の部分は一時的に表面水を溜め、土壌中への水の浸透を助ける。また穴の部分は、畝の表土が流亡しても、それを受けとめる土砂溜めとして機能する。

この共同研究ではトゥクジ (Tukuzi) に実験サイトを設け、裸地区・横畝区・ンゴロ区に分けて侵食試験を実施した。そしてたとえば、雨季全体の侵食による土壌損失量の測定で、ンゴロ区が圧倒的に侵食を抑制することが明らかになった。また、土中に埋設された干し草や作物残渣が、暗渠として優れた排水機能を果たし、豪雨時にも畝の決壊を防止している可能性が高いことが、実験によって確かめられた。

このような土壌侵食の抑制機能の他に、埋設された雑草や作物残渣が有機肥料となる肥沃度維持機能も重要である。また、2年ごとのンゴロ耕作によって下層土に有機物が混和されて作土となるなど、「土造り」の機能もある。ンゴロを造成するときの覆土が、雑草抑制の機能を果たす。ンゴロは多くの機能を統合した農法なのである。

ンゴロ農法は、適切な休閑期間を保持すれば長期にわたって肥沃度が保持されるのだが、たとえば山地帯では土地不足もあって休閑期間が短くなり、肥沃度の低下が進行しつつある。このようにンゴロ農法も、現代的な状況の中で歪みを抱え込みつつあることも事実である。また、ンゴロ農法は明確な性的分業を基礎としており、特に女性の労働に強く依存している側面が指摘できる。社会的な持続性という点で、将来的には大きな課題となるかもしれない。

3.4 ンゴロをめぐる社会生態—ンタンボ研究

山地帯の旧村で100年以上の歴史をもつキンディンバ村と、丘陵地帯の新村（開拓村）で1960年代に人々が移住して創設したキタンダ村は、それぞれ独立した行政村であり、総合的な調査の拠点となった村である。1988年のセンサスによれば、キンディンバの人口は3,082人（男が1,479人、女が1,603人）、キタンダの人口は3,609人（男が1,847人、女が1,762人）であった。それぞれの村は、いくつかの村区に分かれている。キンディンバは7村区、キタンダは4村区で構成されている。たとえばキンディンバの場合、1つの村区は、おおよそ1つの大きな山に対応し、地形的な条件と重なった単位であるといつてよい。

しかし村人は山地に散開して居住して、コーヒー畑とンゴロ畑を耕作している。その散開性ゆえに、土地の利用・所有や社会の単位が不分明であったのだが、長老にインタビューして親

族の系譜調査を試み、村人と共に山を歩いて地形や畑地などについての民俗概念の調査を進めた結果、「ンタンボ」という地形的な単位の重要性が浮かび上がってきた。SUAのスタッフとも議論し、何度も村人に尋ねて、それが基本的な土地の利用と保有の単位であるという結論にたどりついた。

ンタンボは、川の支流などで区切られた山腹であり、「ひと尾根」とでも表現できる地形単位である。1つの拡大家族が開墾時に占有する土地であり、時間の経過とともに、土地所有の社会単位は小親族集団へと発展していく。そしてンタンボ内の人口が増加すると、その一部の成員は新たなンタンボを求めて移住していく。

原型的なンタンボは、中腹部の平坦地に家屋と菜園・コーヒー園が位置し、斜面には一面のンゴロ畑が広がり、谷底部に小規模な菜園や果樹園が散在する。ンタンボの一部にはプッシュが生えた休閑地があり、山頂部には自然林が残る(図5)。ンゴロ畑は、このようなンタンボの一部を占めることによって存続してきたのである。

キンディンバは7村区、43のンタンボで構成された村である。キタンダは4村区、20のンタンボから成る。ンタンボの景観は、地形・地質などの自然条件、開墾以降の歴史的な深度、社会関係の特質に対応して、さまざまなバラエティを示す。マテンゴ社会は、このような「ンタンボ」の集合体であり、その調査に焦点を合わせることによって統合的な学際研究が一気に進んだ。

こうした研究の集積によって、ムビンガ地方のマテンゴ型在来農業は、その伝統に深く根ざした「ンタンボ」に着目し、その利用と保全の水準を向上させる方向で改良する道が最適であ

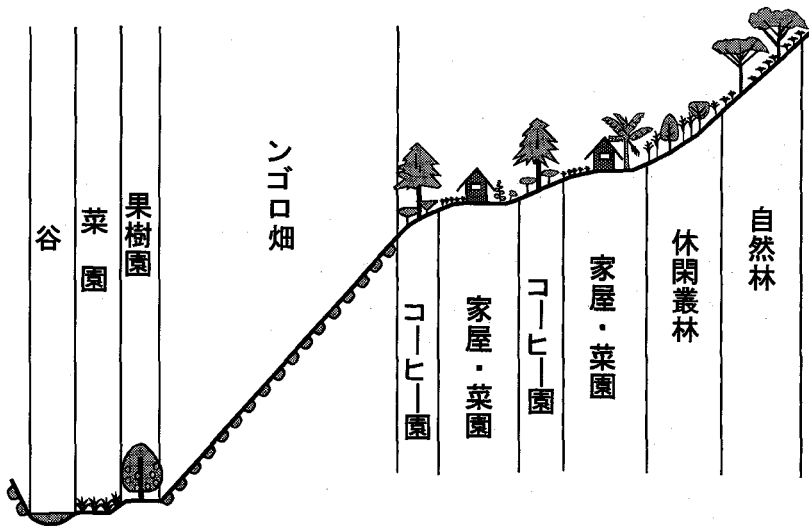


図5 原型的なンタンボの土地利用 (原図 [JICA 1998: 257])

るとの見通しを得た。

3.5 現場主義による地域農村の実態把握

この研究協力では、地域農村の実態を多角的に把握することに基礎をおいて調査を進めてきた。その方法の根幹は現場主義にある。それは、地域農村に入り込み、歩きまわり、農民と付き合い、農村の内側からさまざまな問題を理解する努力を必要としている。私たちはSUAのスタッフと共にマテンゴの村に滞在し、山地を登り降りしながら、土地利用・植生・ンゴロ畑の作付け状況などを観察して記録し、農民からの聞き取り調査を重ねた。それは、現場で問題を発見し、地域の自然・経済・社会・文化の相互関係に留意しながら問題解決の道を探る、現場主義の方法を共有化するプロセスであった。

こうした研究の進展は、一方で、多くの村人が直接的に、あるいは間接的に調査に参加する度合いが深まっていく過程でもあり、研究の成果を現地に還元していくことへの責務を強く自覚させられる過程であった。

この研究協力の成果を活かし、より実践的な活動に踏み込みながら、SUA側の協力継続への強い要望にこたえていく必要がある。このような認識のもとに、SUAのスタッフとも協議をすすめて、「SUA地域開発センター」構想を練り上げたのである。

4. 在来性のポテンシャルと地域発展—JICAプロジェクト方式技術協力—

1999年5月に、「SUA地域開発センター」プロジェクトが始まった。このプロジェクトは、SUAに地域開発センターを設置し、2つのモデル地区での活動を通して、持続可能な地域開発の手法（SUAメソッド）を発展させることを目的としている。対象となるモデル地区は、ムビンガ県のマテンゴ高地とモロゴロ地方県（Morogoro Rural）のウルグル山塊（Uluguru Mountains）である（図1）。マテンゴ高地は研究協力時の対象地区である。もう1つのモデル地区にウルグル山塊を選んだのは、マテンゴ高地との山地という特性を媒介とした比較と、SUAの地元への貢献が重視されたためである。

SUAメソッドは、3年間にわたる研究協力の過程で共有化されてきた方法である。それは上述したように、現場主義による地域農村の実態把握に基盤を置いている。まず何よりも、大学の研究者が地域の現場へ出かけることが基本である。そして、学際的なアプローチによって地域の実態を把握し、住民の参加も得ながら、在来性のポテンシャルを踏まえた地域の発展計画を構想し、実践する。このSUAメソッドは、マニュアル化した調査・実践に還元できるものではなく、地域特性の深い理解に根をおろした洞察力や思考力にも支えられている。SUAメソッドは、「やりながら考える」ことを重視し、各段階での結果をフィードバックしながら経験を蓄積していく手法でもある。そえゆえ、2つのモデル地域での活動経験を検証し、フィードバックによる改良を加え、理論的な検討を深めつつ、さらに練りあげていかなければならない。

このプロジェクトは5年計画ですすめる予定であり、2つのモデル地区では、以下のプロセスで活動が進むことになる。1) 地域の実態把握調査。2) キーとなる問題群とポテンシャルの把握、およびプライオリティの確定。3) パイロットプロジェクト計画の策定。4) パイロットプロジェクトの実践。5) 経過と結果のモニタリングと評価。

現在、このプロジェクトの1つのモデル地区であるムビンガ県では、研究協力の成果を踏まえつつ、キーとなる問題群とポテンシャルの把握に向けて実態把握が進んでいる。村レベルでは、農民の協力を得て、在来のンゴロ農法の小規模な改良実験や、それらをめぐる諸問題についての農民のワークショップを実施するなど、より深い実態把握の努力が試みられている。また、ディストリクト・レベルと、どのような関係をつくり、あるいは保ちながら、村レベルでの活動を積み上げていくかについて現況を把握し、討議を通じて協力体制を構築していくことも重要な課題として取り組んでいる。

モロゴロ地方県・ウルグル山塊では、長期専門家や短期専門家が地域の実態把握の前段階として、広域の予備調査を進めてきた。その過程で、地域の重要な特徴が明らかになってきた。ウルグル山塊では、農業を指標とすれば、モロゴロの町に隣接し果物栽培などが目だつ北部斜面域、テラス畑による野菜生産が中心の西斜面域、熱帯果樹やキャッサバ・トウモロコシ・稲を生産する東斜面域に分けることができるなど、地域内での多様性が顕著である。また小規模ではあるが換金作物の生産指向が強い。このようなウルグル山塊域で、どのような在来性に着目し、地域開発のモデル村落域を選定するかはプロジェクトの根幹に関わる課題である。

文献調査なども踏まえると、19世紀初頭に南部アフリカからのンゴニの侵略などに対応してウルグル山塊への民族移動が加速し、また中期以降に発展するアラブ交易ルートの中継地の1つとしての位置をモロゴロの町が占め、そこへの食糧供給のために道路網や市場が発達してきた歴史や、それ以降の植民地政策などの反映を、ウルグル山塊に住む人々の生活の中に読みとることができる [Young and Fosbrooke 1960; Beidelman 1967; Temple 1972; Maack 1996]。ンゴニの侵略を避けて山地に入り、ンゴロ農法を発達させ、植民地期にはコーヒー栽培を導入したマテンゴとは対照的な生活が展開してきたようにも見える。都市の影響という視点から、マテンゴ高地を「閉鎖系の社会経済圏」、ウルグル山塊を「開放系の社会経済圏」と位置づけて比較検討していくこと（短期専門家の池野句氏の提言）も大きな可能性を秘めている。マテンゴ高地とウルグル山塊では、たとえば風化や侵食の歴史的な深度の違いがあり、そのような地形・地質などの自然条件と人々の生活との累積的な相互関係も検討しつつ地域特性の把握を深め、SUAメソッドを練り上げていくことができるフィールドの選定が極めて重要な段階にある。

5. 若干の考察

川喜田は、文化人類学と国際技術協力との関係について、「技術協力のような真剣勝負を通じてしか見抜けなかった現実、そこから学んで文化人類学を理論的に建て直そうではないか」[川喜田 1989: 88] といった発想も必要だと論じている。アフリカ地域研究は、その地域特性の総合的な把握を目指す基礎研究を積みあげていかなければならないが、一方で、国際協力のよ
うな実践的な調査・研究によって地域理解を深める努力も必要としているのではないだろうか。基礎研究者と実践的な調査・活動に挑む研究者との間で、緊張感のある対話や交流を深める
ことが、新しい地域研究の地平を切り開いていくことにつながるかもしれない。

1968年に今西錦司は、京都大学アフリカ学術調査隊報告の中で『アフリカ研究序説』を書いている。そこで今西は、アフリカを舞台とした人類社会の発達史、ないしは進化史の復元への構想を、のびやかな筆致で描いている。しかし、その最後の部分で「人類学者もいままでどおりの後向きの姿勢で、遅れた面を研究するというだけでは、いつしめだしをくわないともかざらない」と述べている。そして「その国の政府なり、国民一般なりの前向き姿勢を十分に理解し、その動向に同調しながら、われわれもまた前向き姿勢の研究をはじめるときが、遠くからやってくることを、わたくしは願ってやまない」。それが「アフリカとアフリカ人のためのアフリカ研究になることを期待するからである」[今西 1968: 26] と論じた。私も20年あまりのアフリカ研究を経験した後に、私なりに「前向きの姿勢」でアフリカとつきあっていく必要性を痛感した。その帰結のひとつが、国際協力への歩みであった。

引用文献

- Allan, W. 1965. *The African Husbandman*. Westport, Connecticut: Greenwood Press.
- Basehart, H.W. 1972. Traditional History and Political Change among the Matengo of Tanzania, *Africa* Vol.XLII(2):87-97.
- _____. 1973. Cultivation Intensity, Settlement Patterns and Homestead Forms among the Matengo of Tanzania, *Ethnology* 12: 57-73.
- Beidelman, T.O. 1967. *The Matrilineal Peoples of Eastern Tanzania*. London: International African Institute.
- 今西錦司. 1968. 「アフリカ研究序説」今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究：京都大学アフリカ学術調査隊報告』西村書店, 21-26.
- JICA. 1998. *Integrated Agro-ecological Research of the Miombo Woodlands in Tanzania: Final Report*.
- 海田能宏. 1993. 「問題群としての地域」矢野 暢編『地域研究の手法』講座現代の地域研究 1, 弘文堂, 227-246.
- 掛谷 誠. 1999. 「東南アジアをどう捉えるか (5) -アフリカ世界から」坪内良博編『〈総合的地域研究〉を求めて：東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会, 399-415.
- 川喜田二郎編. 1989. 『国際技術協力の哲学を求めて』名古屋大学出版会.
- Maack, P.A. 1996. We Don't Want Terraces! In G. Maddox, J. Giblin and I.N. Kimambo, eds., *Custodians of the Land: Ecology and Culture in the History of Tanzania*. Dar es Salaam: Mukuku na Nyota, pp. 152-169.

- Ndunguru, E. 1972. *Historia, Mila na Desturi za Wamatengo*. Dar es Salaam: East African Literature Bureau.
- Pike, A.H. 1938. Soil Conservation amongst the Matengo Tribe, *Tanganyika Note and Records* 6: 79-81.
- Schmied, D. 1988. *Subsistence Cultivation, Market Production and Agricultural Development in Ruvuma Region, Southern Tanzania* (Ph.D. dissertation). Nurnberg: Erlangen University.
- Temple, P.H. 1972. Soil and Water Conservation Politics in the Ulugulu Mountains, Tanzania, *GEOGRAFISKA ANNALER* · 54 A · 3-4: 110-123.
- Young, R. and H. Fosbrooke. 1960. *Smoke in the Hills: Political Tension in the Morogoro District of Tanganyika*. Evanson: Northwestern University Press.